

令和2年度 校内研究反省のまとめに対する見解

1 研究の成果

(1) コロナ禍でも一人一回授業の効果

①研究の考え方を継続することができた。

コロナ禍にありながら、「ひびき合う 三の丸の子どもたち」という主体的・対話的なテーマを掲げ、研究をスタートさせた今年度であったが、いかにしてテーマを追究するか困難を極めた。しかし、7月に小林先生にお話をいただき、また、これまでの研究経験者や研究推進委員の声かけなどもあり「その中でできることをしていく」という前向きな姿勢を維持することができた。一人一回の授業は、一人ひとりが、どうしたらテーマを追究できるか、自分を研鑽させる唯一の機会であり、学年やブロックで教材の理解を深化させたり、子どもの思考の流れを考える技能を高めたりすることができる。そうした授業への姿勢は、これまで積み重ねてきた研究の考え方を継続できた大きな成果だといえる。

②新しく来た職員にも考え方を共有することができた。

なかなか一度では理解しにくい研究の考え方を理解するには、やはりその実践に出会い、見るのが大いに有効であるといえる。本時の授業だけでなく、一緒に検討したり、単元構想を考えたりすることも含めると、かなり研究に触れる機会が増え、学校全体としてテーマに向けて追究する姿勢を保てたと考える。

③子どもたち自身も昨年度までの「ひびき合い」を意識でき、合い言葉を意識することができた。

そうした授業を行うにあたっては、日々テーマに向けての努力が必要になる。教師側は、多かれ少なかれそれをめざして、6月から取り組んできた。すなわち同時に、子どもたち自身も「ひびき合い」を意識し、友達と対話し、追究しようという姿勢であったらうと考える。「ひびき合い」を目指す授業がなければ途切れてしまうが、子どもたちにとっても、来年度へつなげる1年になっていると考えたい。

④年間三回の全体研

今年は、ブロックを超えての学級経営検討会や研究授業の参観ができなかった中で、全体研があったことは、ブロックを越えてどんな子どもを育てていくのか、系統的に学ぶためにも良いチャンスだったといえる。

(2) 朝会で「ひびき合う」の意味を具体的に理解できた。

本来ならば、子どもたちと対面で行う朝会で、「ひびき合う 三の丸小学校」について、実際に子どもたちと対話しながら、理解し合うのであるが、今年度は校内テレビ放送にて朝会を行った。年間に一回のことであるが、最初に「ひびき合う姿」について具体的にイメージを共有することが大切である。子ども向けに話しているが、職員側にとってもわかりやすく、とてもよいスタートであることが改めて感じられた。

(3) 学級経営検討会について

学級経営検討会については、多くの先生方に本年度も「参考になった。」「よかった。」という感想をいただいた。コロナで2回になったことについて、「来年度は例年通りの3回を」という前向きなご意見もある。今年、2回になったことで個学と交流級の間では、学級経営の情報交換の場を失った。学級経営検討会は、若い先生たちには、「書き方」「実態に対する手立ての組み方」「校内研究と学級経営のつながり」「年間の見通し」など、様々な要素が参考になっている。また、経験のある教諭ほど、授業は学級経営が大きく左右するという点について深い理解があるので、どの年代からのニーズも高いと考える。検討会で話したことをふまえ、学年やブロック内で子どもの名前を出しながら話し、時には授業の様子を見合ったり、交換授業をしたりしながら、研究の土台の部分や研究につながる授業実践について話す機会をもつことを今後も大切にしていきたい。

(4) コロナだからこそ先行研究を生かす。

6月スタートで時数が凝縮される中で、「ひびき合い」を目指すとなった時に、役に立ったのが本校の「先行研究」である。これまでに積み重ねてきた実践を、アレンジしながら、普段の授業に生かすことで、子どもの思考の流れに沿った授業が部分的にでも取り入れることができる。そうした取り組みが今年度もあった。今後も是非生かし、様々な実践を普段から試みる姿勢を持ち続けたい。

2 研究の課題

△日程が密になってしまった。

6月スタートだったため、単元構想講習会など、必須な事柄を位置づけたため、研究授業が9月から12月に集中してしまった。それによって、ブロックを越えての参加が困難であったり、個学の授業を見に行くことができなったり、検討が立て込んだりした。また、自分の学級にあった教科で、じっくり単元構想を考えるというゆとりもなかったため、各学年一本の単元をじっくりやるというスタイルが多かった。来年度は例年通り、以下の通り、7月までの研究授業回数を増やし、ゆとりのある創意工夫のできる計画にしていきたい。

(例)

4月から7月	9月から12月	1月から3月
低 授業(ブロック)	授業(ブロック)×4 全体研×1	授業研なし(まとめるため)
中 年度始提案授業(推進委員・全体研)	授業(ブロック)×5	※小林先生の都合によって
高 授業(ブロック)	授業(ブロック)×4 全体研×1	1月に全体研があることもある。

3 指導案について

来年度も同じ研究の方法で行ってほしいという希望がある。しかし、コロナ禍が続く中であっても来年度、指導案については、研究部で話し合い、全員が書く必要性があると判断した。その理由は以下の通りである。

① 指導案は授業者のために書く

書くことで、その学習材の魅力や、特質、学習の価値をしっかりと捉える事になる。また、どんな子どもたちに、どうなってほしいのか、そのためにどんな手立てを打つのかも、文章を書くことで明確になる。その明確なイメージと手段をもって授業を創っていくことは、授業者にとって必要なことである。

② 指導案は参観者に授業を理解してもらうために書く

「学級の実態がこうだから、こんな子どもたちになってほしい、だからこんな手立てで迫る」と書かれた物を読み込み、授業者のねらう子どもの変容がみられるのか、そのためにどんな手立てがよいのか、を見とるために、指導案を読む。そうした視点を持って参観に臨むことが、授業を見る力量をあげることに繋がると考える。

4 三の丸の研究のこれから

研究を来年度も継続していきたいと思う。引き続き子どもに対話的で主体的な学習の機会を保障していきたい。

5 今後の予定

- ① 研究紀要個人に返却 → ②赤を修正し、フォルダに入れます。(2月17日まで)
- ② 概要、紀要、資料をHPにアップします。(3月26日まで) ※視聴覚部の方、ご協力お願いいたします。